

試
読
版
無料

2013年
5月1日より

絶
賛
発
売
中
!

ようこそ 感動指定席へ!

言えなかった「ありがとう」

志賀内泰弘 著 　　ごま書房新社 刊

感動の100話より
5話を厳選

中日新聞で300回以上連載中の人気コラム
「ほろほろ通信」が読者の熱望により書籍化!
ココロがほろりとする100話の物語



ごま書房新社

著者略歴

志賀内 泰弘 (しがない やすひろ)

「プチ紳士・プチ淑女を探せ!」運動代表。2006年～現在まで、中日新聞(愛知県内版)にて連載コラム『ほろほろ通信』を執筆中(出版時現在、第310回)。自他ともに認める「いい話の百貨店」。「いい話がありますか?」が口癖で、全国から心温まる「いい話」を集めて発信する仕事をしている。学校や家庭のほか、ホテルや鉄道、飲食店などのホスピタリティあふれるサービスの「いい話」も好評で、大手企業では研修に採用されている。著書に、『なぜ「そうじ」をすると人生が変わるのか?』(ダイヤモンド社)、『なぜ、あの人の周りに人が集まるのか?』『毎日が楽しくなる17の物語』(共にPHP研究所)、高野登氏との共著『また、あなたと仕事したい!』と言われる人の習慣』(青春出版社)ほか多数。

まえがきより抜粋

「ほろほろ」とは、花びらや葉っぱ、そして涙が静かに零れ落ちる様のこと。心がポカポカして、ときには胸が熱くなる「ちょっといい話」のコーナーです。

毎週日曜日の朝刊に掲載されていることから、「今日の話はいいねえ」とか「泣けるよ～お父さんも読んでみて」などと家庭で話題になっているという声をよく耳にします。また、小・中学校の先生方からは、「道徳やホームルームの時間に活用しています」というお便りも。生徒さんの感想文を送って下さる先生もいらっしゃいます。(中略)

このコラムの連載が始まる時、編集者さんから二つの点を依頼されました。一つは「投稿者が主役で基本的に実名」であること。いま一つは、「物語性を重視し教訓話にしない」ことです。ときどき、匿名希望の投稿をいただきます。新聞に自分の名前が載るのは恥ずかしいと思われる方も多いでしょう。そんな時には、「実名の記載が決まり事であること」を説明し、「できましたら名前を書かせていただけませんか」とお願いします。もちろん、ご本人の意に反しない範囲で。

そのため、すべてが実名入りの「実話」です。「事実は小説より奇なり」と言います。実話だからこそ、心の奥底にジーンと沁みます。

『ようこそ感動指定席へ! 言えなかった「ありがとう」』
志賀内泰弘 著 　　ごま書房新社 刊 定価(税込)1,365円 236ページ

全国の書店、Amazonにて発売中!

書店にない場合 TEL **0120-29-9625** にて宅配も可
(クロネコブックサービス)

おすし屋さんの思い出

横井和子さん

40前の出来事。名古屋市名東区の横井和子さん（77）は、ご主人を亡くした。勤務先で倒れ急死だった。

当時7歳の長男と9歳の長女を抱えて途方に暮れた。病院の厨房（ちゅうぼう）に職を見つけ、働くことになった。2交代制の遅番の日は、帰りが午後8時近くになる。おなががすかないようにと、毎日おやつを用意して出掛けた。

給料日には、二人の子どもを連れて外食することにしていった。大衆食堂で丼物やうどんを食べる。それでも月に一度だけのぜいたくだった。

ある日のこと、テレビを見ていた長男が「僕もあいうおすしが食べたいなあ」と言った。画面には、カウンターのお客さんに、職人さんが次々に2貫ずつ握って出しているシーンが映し出されていた。

今と違いファミリレストランも回転ずしもない時代のことだ。おすしといえば、年に一度くらいお客さんが来たときに出前で注文して食べるものだった。

次の給料日に、思い切って近くのおすし屋さんへ出掛けた。子どもたちにわからないように、お店の奥さんにこっそり「あること」を頼んだ。奥さんは快く引き受けてくれた。

みんなでカウンターに座った。注文したのは出前で取るのと同じおけずしだ。しかし、ご主人は子どもたちの前に2貫ずつ握っては出してくださった。面倒で時間がかかるのにもかかわらず。最後の2貫が出され「これで終わりよ」と言われると、子どもたちはうれしそうに顔をしていた。

そのお店は高速道路建設のためなくなってしまうが、今でもお店のご夫婦を思い出すたびに涙が出るという。（2011 / 3

13

著者からのメッセージ

胸がキュッと痛くなりました。映画「三丁目の夕日」の1シーンのようです。



ピンポーン

古屋きみ子さん

津島市の古屋きみ子さん(61)が、二人のお孫さんとお墓参りに出かけた時の話だ。豊橋まで電車に乗り、そこからさらにバスに乗り換える。8歳と6歳の女の子にとっては、ちょっとした旅である。

帰りのバスでお孫さんたちは運転手さんの真後ろに陣取った。次の停留所がアナウンスされた。古屋さんに尋ねる。「押してもいい？」と。「だめよ」と答えるが、よほど降車ボタンが気に入ったらしい。アナウンスのたびに何度も二人で「押してもいい？」と聞く。

その様子を聞いていた運転手さんが古屋さんに「どこまで行かれますか」と尋ねた。降りる場所がわからないのではないかと気遣ってくれたようだった。「終点まで行きます」と返事をした。

やがて終点を告げる録音のアナウンスが車内に流れた。お孫さんたちはボタンを押さなくてもよいことがわかり、がっかりしてしまった。その時である。マイクを通して運転手さんの声が聞こえた。「ボタン押してもいいよ!」。上の子は古屋さんの顔をのぞき込むようにして「いいの?」と聞いた。「うん」と言うときささずボタンを押した。「ピンポーン」。にっこりとして本当にうれしそうだった。

またまた運転手さんの声が車内に流れた。「もう一人の子も押してもいいよ」。下の子も喜んで「ピンポーン」。乗客全員がその様子を見ていた。バスを降りると二人とも大きな声で運転手さんに「ありがとう」と言って手を振った。バスを降りると二人と終点なので時間が来るまでバスはなかなか発車しない。動き出すまで手を振り続けた。

お孫さんたちは「またお墓参りに行こうね」と言っている。

(2008 / 1 / 27)

著者からのメッセージ

この運転手さんは、子どもの気持ちができるんですね。心の目線をお孫さんに合わせているのでしょう。たかがピンポーン、されどピンポーン。



お婆ちゃんのカユウリ

三輪君子さん

2年ほど前の話。会社員の三輪君子さん（39）は休日に名古屋まで出掛けるため、豊橋駅で電車を待っていた。ホームには大勢の人がいたので「どうか座れますように」と祈っていた。幸いドア近くの席に座ることができ「これで本を読んだり、ちょっと眠ったりできるなあ」とほっとした。

ところが一つ目の駅で、70代後半とおぼしき小柄なお婆あさんが乗って来た。正直なところ、一瞬迷ったという。席を譲ろうかどうしようかと。でも思い切って声を掛けた。「あの、良かったら座ってください」。そう口にはしたものの、恥ずかしながら「席を手放すのか、残念」などと思っていた。

お婆あちゃんは申し訳なさそうに座ってくれた。もう10分ほどで名古屋に到着するというころ、お婆あちゃんは何やらかばんの中をごそごそと探り始めた。そして、ビ

ニール袋に入った2本のカユウリを差し出し「これ、けさ採れたてのものだけど、持ってって。立たせてごめんね」。自分の畑で育てたカユウリだろう。よほどうれしかったのか、満面の笑みで三輪さんの手に持たせてくれた。その気持ちを遠慮なくいただくことにした。

「電話が次々とかかって来て、仕事がかどらずイライラすることがあります。ついつい心にやさしさを忘れそうになる時、あのお婆あちゃんの笑顔を思い出すようにしています。お婆あちゃん、ありがとうー」と三輪さん。その晩の食卓にはサラダが並んだ。「カユウリってこんなにおいしかったっけ」という三輪さんを、事情を知らない母親は不思議そうに見ていたという。（2009 / 4 / 12）

著者からのメッセージ

お婆あちゃんの気持ち、よくわかるなあ。何かお礼がしたかったんだよね。たまたま持っていたカユウリを差し出した。感謝の気持ちをいっぱい込めたカユウリ。そりゃあ、美味しいなあ。

「よかよか」

松下芳子さん

豊橋市の松下芳子さん(91)が小学校の先生をしていた37年ほど前のある日のこと。仕事中に博多の実家から電話が入った。母親が危篤だと聞き、豊橋駅から新幹線に飛び乗ると、車内は高校生でいっぱい。

松下さんが通路に立っているのを見た一人の男子生徒が、席を譲ってくれた。彼らは鹿児島の高校生で、東京への修学旅行の帰り道とのこと。

何度も断ったが「よかよか」と鹿児島弁で勧められ「では交代で」と言い厚意に甘えることにした。ところが途中、何度も「代わりましょう」と言うのだが「よか」と答える。新聞紙を通路に敷いて座ったまま、とうとう博多駅に着いてしまった。

母親の葬儀を終えて自宅に戻ると、松下さんはその高校の校長先生にお礼の手紙を書いた。しばらくして、男子生徒の母親から礼状が届いた。中には手紙とともに新聞

の切り抜きが入っていた。校長先生が修学旅行の帰途の善行を鹿児島の新聞社に投稿し、それが記事になったものだった。「よか」と大きな見出しが付いていた。

卒業後、警察官になったと聞いた。たまたま熊本へ行く機会があって鹿児島まで足を延ばし、警察学校を訪ねて再会を果たした。その後、何年か文通が続いたが、どちらからともなく便りが途絶えた。二度の転居と4度の入退院で当時の新聞記事もなくしてしまったため、名前さえ思い出せない。

「たしか学校名は市来農芸高校？ かと思います。きっと要職に就いて活躍されていることでしょう。もしかかなうなら、もう一度手紙のやりとりをしてみたい」とおっしゃった。(2011/6/26)

著者からのメッセージ

人って、こんな大昔のことでも親切にされたことは忘れないものなのですね。



募金箱に少しずつ

北村安代さん

名古屋市中川区の北村安代さん（69）がボランティアの仕事に出掛けるため、金山総合駅の南口でバスを降りた時のこと。出入り口付近から、子どもたちの「お願いしまーす」という声が聞こえた。目をやると10人くらいの小学生が募金箱を抱えてずらりと並んでいた。

北村さんの前を20代の男性3人が歩いていった。全身黒ずくめ。革ジャンに革靴、髪が総立ち。耳や鼻にはピアス。バイクのヘルメットを手にし、腰にはチェーンが垂れていた。彼らが近づくと、子どもたちは一斉に呼びかけた。「ユニセフ募金にご協力を」と。すると、そのうちの一人が箱の中に小銭を入れた。子どもたちは声をそろえて「ご協力ありがとうございます」と言う。

ところが、それで終わりではなかった。その男性は、10人の募金箱すべてに順にお金を入れていったのだ。その後に続いて、仲間の二人の男性も同じように10人の募金箱へ。子どもたちの「ありがとうございます」の声が、笑顔とともに連呼された。北村さんは感心した。ほかの子の箱に募金が入ると「私の箱にも入れてくれないかなあ」と思うかもしれない。仮に同じ100円でも、10円を10人の子の箱に入れることで、子どもたちの励みになるに違いない。

最後には募金箱を抱えていた小学1年くらいの子の頭をなで、3人は来た道に戻って行った。この時、北村さんは彼らがわざわざ募金をするために立ち寄ったことに気付いた。まねをして、全員の箱に募金をしたという。少しずつだけ。（2008／8／17）

著者からのメッセージ

募金するとき、募金活動をしている人の気持ちなど考えたことがありませんでした。きっと彼らも、募金活動をしたことがあるに違いありません。だから、その子どもたちの気持ちがわかったのでしょうか。

